

107年ぶりただいま優勝旗とともに



母校のグラウンドでの記念撮影に臨む慶応の選手たち＝8月25日午後、横浜市港北区、嶋田達也撮影

第105回全国高校野球選手権記念大会で、107年ぶりの優勝を果たした慶応の選手たちが25日、横浜市港北区の同校に戻った。深紅の大優勝旗とともに、選手たちは慣れ親しんだグラウンドで、改めて喜びをかみ締めた。

この日は全部員を集めてミーティングが開かれた。森林貴彦監督は報道陣に「選手には、甲子園優勝は誇れる成果だと思うが、これを人生最高の思い出にしないでくれ、これを越えるような思い出とか、わくわく感を感じながら仕事をするとか、そういったことをもっと経験してほしいという話をした」と語った。

主将の大村昊澄（そらと）選手（3年）は取材に「一から自分たちのやりたい野球をやってほしい」と後輩への思いを口にした。新チームの主将に選ばれた加藤右悟選手（2年）は「チームをまとめて日本一になりたい」と意気込んだ。（上嶋紀雄）



ひと もりばやし たかひこ
森林 貴彦 さん(50)

母校の慶応を

2023年8月24日

107年ぶりの全国制覇に導いた

「常識」を疑おう。そして、考えよう。教え子たちはその言葉に導かれ、107年ぶりの全国制覇を成し遂げた。

自身も慶応高で内野手。慶大卒業後はNTTに就職したが、高校野球への情熱が忘れられずに筑波大学大学院でコーチング論を学んだ。研究室で陸上選手や元力士らと出会った。準備運動の話題で「野球では全員で足をそろえる」と言う「意

味あるの？ 一人ひとりのためになっている？」。当たり前が、揺さぶられた。長年受け継がれた指導法に「理屈を知らないままに練習を繰り返すのは、良いことなのか」と疑った。

2002 年に慶応幼稚舎（小学校）の教諭になるとともに、慶応高の野球部コーチに。15 年から監督になった。「一人ひとりが、自ら考えて行動する野球」を掲げ、個人練習も多く組み込んだ。選手自身で練習テーマを設け、それぞれに異なる課題を乗り越えて欲しいからだ。「自ら考えることは、今後の人生の財産にもなる」と信じる。

自主的な野球では、勝利につながらないとの声も耳にするが「成長こそが高校野球の価値だ」と、「成長」と「勝利」の両立を追究してきた。教え子たちは選抜大会で仙台育英に敗れたことをきっかけにさらに課題を設け、成長。再戦を制して頂点に立った。「高校野球の新しい姿につながるような勝利だったんじゃないかと思う」。お立ち台で涙を浮かべた。

（文・原晟也 写真・竹花徹朗）

朝日新聞
DIGITAL

慶応監督がいま伝えたいこと

2023 年 8 月 24 日

「優勝を人生最高の思い出にしないで」



握手をする大村昊澄（そらと）主将（左）と森林貴彦監督=2023 年 8 月 24 日午前 9 時 49 分、大阪市淀川区、原晟也撮影

第 105 回全国高校野球選手権記念大会の決勝から一夜明けた 24 日、107 年ぶり 2 回目の優勝を成し遂げた慶応は 3 週間余りを過ごした大阪市の宿舍を出発し、横浜市に戻った。

出発前の取材に、大村昊澄主将（3 年）は「体が熱くて興奮してあまり寝られなかった」と明かし、「いろいろな人に支えられて日本一になれた。

感謝の気持ちを伝えたい」と話した。

25 日には、全部員が集まり、ミーティングを行う予定だ。部員に伝えたいことを森林貴彦監督に聞くと、「決勝で勝つ経験をさせてもらった。全部員に『ありがとう』と伝えたい。そして、甲子園優勝を人生最高の思い出にしないように。そこにしか、すがれないような人生にしてほしくない。もっと素晴らしい経験をしてほしいと伝えたい」と答えた。

（原晟也）

朝日新聞
DIGITAL

慶応・大村昊澄が心を決めた出会い



日本一の主将は

「人間力」なんだ

2023 年 8 月 23 日

◀慶応一仙台育英 二回裏仙台育英無死二、三塁、打者鈴木を迎え、先発鈴木に声をかける二塁手の大村主将=友永翔大撮影

神奈川大会直前の 6 月下旬。練習前のグラウンドで、一人、汗をかきながら、草むしりをする人影があった。

近づいてあいさつすると、笑顔で返事を返してくれた。主将の大村昊澄（そらと）（3 年）だった。

大会直前は、苦しい日々だった。テスト期間で練習時間は限られ、体調不良者が続出した。大村自身も足首を痛めた。

テーピングを巻いて、足を少し引きずりながら歩いていた。

そんな中だからこそ、見せたい姿があった。

「日本一の主将」になる。大村は心に決めている。

二回裏、先発鈴木⑩に声かける大村主将=林敏行撮影▶

新チーム結成後、部員の投票で主将に選ばれた。身長 **163 センチ**の小柄な二塁手。スタメンで出場していたわけではない。監督からは「ベンチで支えるキャプテンになる」とも言われた。

そんな自分がどんな主将を目指すべきか。

明確な目標があった。

目に焼き付けたホームラン

小学6年のとき、夏の甲子園を観戦した。身長168センチ、大阪桐蔭主将の**福井章吾さん**が放った本塁打に目を奪われた。「小さくても打てるんだ」。小さな体に希望を与えてくれた。

高校1年の6月、先輩の紹介で福井さんに会うことができた。大阪桐蔭で選抜制覇、夏は仙台育英の前にサヨナラで敗れたが、進学した慶応大でも主将として全日本大学選手権を制した憧れの人は、想像したとおりの人だった。初めて会う後輩の自分に、低姿勢にあいさつをしてくれた。謙虚な姿勢に、「日本一の主将は『人間力』なんだ」と実感した。

昨秋の関東大会で敗退し、寮に帰った大村は、帽子のつばの裏に「日本一の主将」と書いた。ここで書かなければと、自然とペンを持っていた。

土浦日大一慶応 六回裏慶応1死三塁、適時打を放つ大村。捕手塚原=田辺拓也撮影

だが、選抜は仙台育英に敗戦。慶応は初戦で姿を消した。

春季県大会では個人成績が振るわず、先発出場を逃す日が続いた。選抜への出場でチームは浮足立ち、雰囲気も悪かった。

「うまくいかない」

涙があふれた日もあった。

だが、自分が暗い姿を見せていたからではないかと気づいた。結果を残せず、今まで言えていたことが言えなくなっていた。

あの敗戦で気づかされた

このままではダメだと、私生活から改めた。主将である以上、常に見られている意識を忘れず、「周りよりも努力を」と自分に言い聞かせた。

選抜で気づかされたことも多かった。

冬の期間は、「新しい高校野球の姿を見せたい」と何度も口にしてきた。だが、「結果が伴わないと意味がない」と身をもって感じた。

慶応一仙台育英 試合前、笑顔を見せる大村主将(左)ら=友永翔大撮影

そして、日本一のレベルも体感できた。全国レベルの投手陣からどう点を取るか、打ち返すか。目標がはっきりした。

だからこそ、この夏、甲子園に乗り込ん



でからも、仲間に厳しい言葉をかけ続けた。

「このままじゃダメだ」

「めざすところは日本一だろ」

プレーでも主将の姿を見せた。

流れが悪くなりそうなとき、追い込まれてもファールで粘って四球を選ぶ。準決勝では、追い込まれても粘って、粘って、追加点となる適時打をあげた。

試合後の取材で、いつも「まだまだ仲間に助けてもらっている」と話していた大村に決勝前日、「日本一の主将になれそうですか」と尋ねると、初めて手応えをのぞかせた。

「日本一まであと少しのところに来ている。勝利のために、チームのためにやれることを全てやりきったとき」に、日本一の主将に手が届くのかな」

チームは「KEIO 日本一」を掲げて仙台育英（宮城）に挑み、107年ぶりの2度目の優勝を成し遂げた。試合後、大村は日本一になったチームの主将としてインタビューを受け、語った。

「日本一とか、高校野球を変えたいとか、大きなことを言ってきて、笑われることもあって、言われることもあった。それに耐えて、絶対日本一になってやるんだという強い思いでやってきた。報われた瞬間だった」

「日本一の主将になれた」

(原晟也)

朝日新聞
DIGITAL

慶応の優勝支えた学生コーチたち

8月24日

球児と二人三脚、監督との橋渡しも



第105回全国高校野球選手権記念大会で、107年ぶり2度目の優勝を果たした慶応には、野球部出身の大学生が「学生コーチ」としてチームを支える伝統がある。選手たちと年齢の近い学生コーチは監督らと選手の「橋渡し役」。森林貴彦監督もかつて務めていた。

◀試合を見守る慶応の学生コーチ、大谷航毅さん(中央)

現在の学生コーチは11人。ポジションごとに担当がある。捕手を担当する慶応大3年の大谷航毅さん(20)は、今夏の甲子園にも同行した。

自身の高校時代も、当時の学生コーチが親身になって技術や捕手の心構えを教えてくれた。3年時は新型コロナウイルスの感染拡大で最初の緊急事態宣言が出た2020年。練習すらままならず、最後の夏は県の独自大会で5回戦敗退だった。



「不完全燃焼だった」と振り返る。

だから、「卒業したら学生コーチになろう」と決めていた。

大学生活のほとんどは野球部の活動に捧げている。ただ、勉強との両立は楽ではない。毎年、夏の神奈川大会期間中は大学の試験期間と重なる。今夏も練習の合間に勉強したり、行き帰りの電車の中でパソコンを開いてレポートを書いたりした。

選手たちを応援する慶応の学生コーチたち

甲子園では、常にタブレット端末を片手に対戦相手の試合映像を見た。1チー

ムにつき最低 15 時間ほど。勝ち進んで試合間隔が中 1 日ともなれば、睡眠時間は 3 時間に。移動中のバスで仮眠を取って、ほとんどの時間を相手打者の研究や捕手との配球の相談などにあてた。

慶応が優勝を決めた瞬間、喜ぶ学生コーチたち=いずれも 8 月 23 日、阪神甲子園球場、小林直子撮影

入学当初から二人三脚で歩んできた正捕手の渡辺憩（3 年）は、「大谷さんが一からキャッチャーとしての僕を作ってくれた」と感謝する。仙台育英（宮城）との決勝に向けては、2 人で相談して相手打者一人ひとりの対策や配球を練ってきた。

学生コーチたちが接戦になると予想した決勝戦は、中盤に大きくリードする展開に。それでもスタンドで見守った大谷さんは、「流れがいつ相手にいってもおかしくない」と気を抜かなかった。

優勝が決まった瞬間、ようやく笑顔に。「やってきたことが間違っていなかったことを証明してくれた彼らにありがとうと言いたい」と拍手を送った。

そして、「（優勝は）この先のステージにものしかかってくる。ここからが大変なんだろうな」とぼつり。後輩たちをどこまでも気遣っていた。（小林直子）



朝日新聞
DIGITAL

地元の元監督がみた成長の転機

2023 年 8 月 24 日

慶応の優勝を支えた栃木出身3選手



慶応一仙台育英 三回表慶応 1 死、安打を放つ加藤。捕手尾形=田辺拓也撮影

107 年ぶり優勝を決め喜ぶ投手小宅（中央左）、捕手渡辺憩（同右）、二塁手大村（左）ら慶応の選手たち=竹花徹朗撮影



107 年ぶりの頂点に立った慶応（神奈川代表）。エースやクリーンアップなどで快進撃の一翼を担ったのは、栃木県出身の 3 選手だった。いずれも 2 年生で、来年に向け、さらなる飛躍を誓った。

この夏の甲子園には、宇都宮市の中学生の硬式野球チーム「**県央宇都宮ボーイズ**」（入江孝夫代表）から巣立った選手が多く出場した。文星芸大付（栃木代表）2 人、日大三（西東京代表）2 人、浦和学院（埼玉代表）1 人、そして慶応でクリーンアップを打つ加藤右悟（2 年）とエース小宅雅己（2 年）の 2 人、計 4 校 7 選手だ。同チームの影山崇監督は活躍に目を細めた。

宇都宮学園（現文星芸大付）が選抜ベスト 4 に進出した 1988 年のエースだった影山監督は、小宅のおじでもある。投手出身の指導者として、幼いころから小宅を見てきて「持って生まれた（投手としての）センス」を感じていた。特にたけているのが「**今、このコースに投げてはまずい**」や「**ここはギアを上げる必要がある**」と察知する能力。常に力いっぱい投げる普通の中学生とは違っていた。

今の投球も、立ち上がりは力を入れすぎないで丁寧に投げたり、新しいボールは手でこねて自分の肌に合わせたり、中学時代からの指導を自分なりに考えて採り入れていることを感じさせるという。

加藤も小学生時代に一目見て「この子と一緒にやりたい」と思った選手だった。小学生とは思えない**視野の広さと、ほかの選手を引っ張るリーダーシップ**があった。

影山監督は彼らの転機のひとつとして、2020 年のコロナ禍を挙げた。一生懸命に練習をしたのに感染拡大防止のため大会は中止に。悔しそうな先輩の後ろ姿をみて一緒に泣いていたのが、加藤や小宅だった。

「自分たちが上級生の代は、先輩たちの分まで絶対に活躍する」。2 人に石橋で今春の選抜大会に出た入江祥太らが加わり、春の全国大会で優勝。「自分たちで考えて、自分たちで行動する。選手の意識が変わっていった」という。

全国大会を制したことで数多くの高校が欲しがった小宅と加藤。当初はそれぞれ別々の学校への進学を予定していたという。2 人を特に熱心に勧誘したのが慶応だった。赤松衡樹部長が宇都宮市の練習グラウンドまで何度も足を運び、「慶応に新しい風を吹かせたい」と 2 人を必要としていることを説いた。2 人も慶応の「考える野球」にひかれ、春以降に猛勉強。そろって入学を決めた。

慶応一仙台育英 四回裏仙台育英 2 死一、三塁、登藤を三振に打ち取りガッツポーズでベンチに戻る慶応の先発鈴木=友永翔大撮影



この日の決勝戦では、もうひとりの栃木県出身者で、中学時代に軟式で活躍した那珂川町立小川中出身の鈴木佳門（2 年）が先発した。スタンドから見守った母親の由香里さん（45）は 24 日が誕生日で、1 日早い母へのプレゼントになった。由香里さんは「自分の意見を言えるようになって成長を感じる。大舞台に立たせてもらった感謝の気持ちで投げてくれたら」と話した。

力投の鈴木を引き継いで五回から救援した小宅は、モットーとして帽子のつばに「**必笑**」と書いている。影山監督によると、中学時代、コロナ禍で苦しんでいるときにチーム内で生まれた言葉だ。「コロナ禍で大会がなくなっても、選手が頑張ってきたことは事実。最後は必ず笑おう。みんなで笑えるように悔いのない練習をし、悔いのない試合をしよう」という意味が込められている。その言葉通り、選手たちに最高の笑顔が広がった。

優勝を決めた小宅は「一番はエンジョイ・ベースボール。楽しくやらないと意味がない」。来年も笑顔で頂点をめざすつもりだ。（津布楽洋一）

初アルプス席でエンジョイ・ベースボール



準決勝をアルプス席で観戦する慶応の上田・前監督=8月21日午後0時54分、阪神甲子園球場、中村英一郎撮影

第105回全国高校野球選手権記念大会準決勝、慶応のアルプス席に前監督の上田誠さん（66）の姿があった。1990～2015年に監督を務め、選手の自主性を重んじる「エンジョイ・ベースボール」を合言葉に、春夏計4度甲子園に出場。08年には、同校を88年ぶりの8強に導いた。森林貴彦監督も教えた生徒だ。

プレーの合間を見計らって、話題の自由な髪形について聞くと、「今ごろマスコミが騒ぐことに違和感。でも、議論になるのは良いこと」と笑った。部員は戦前から丸刈りではないという。敗退し、「髪切って出直してこい」と言われても、何かを強制しないことが誇り。「部に限ったことではなく、塾風（校風）です」

丸刈りが悪ではない。「清潔感があり、帽子が脱げにくいメリットもある」。考えた結果の丸刈りであれば問題はない。自ら出した答えに胸を張ることの重要性を説く。

全国高校野球北神奈川大会での優勝が決まり、選手たちに胴上げされる慶応の上田誠・前監督=2008年7月27日、横浜スタジアム、斎藤健一郎撮影



長年続く慣習に「これはおかしくないか」と疑問を持ってほしいと指導してきた。「例えば全員整列で行うグラウンドあいさつ。営業社員が取引先の受付で同じことをするのか」と問いかけた。すると、部員らは甲子園出場時、グラウンド整備員に個別に「ありがとうございます」と感謝を伝えた。上田さんは「これぞまさに」と喜んだ。

1世紀ぶりの快挙に「当時の卒業生は天国で喜んでいるでしょう。森林監督が慶応の野球を進化させてくれた」としみじみ話す。初めて訪れた慶応アルプス席で一体感を楽しんでいた。

（中村英一郎）

89歳の元球児「若返った」

2023年8月23日



アルプス席で応援する元野球部員の明浦靖夫さん=2023年8月23日、阪神甲子園球場、松永和彦撮影

元野球部員で投手だった明浦靖夫さん（89）は、神奈川県相模原市の自宅から駆けつけた。当時約60人の部員がいて、今でも4、5人と連絡を取っているという。「入部した時に針と赤い糸を渡された。みんなボールを自分で持ち帰って縫っていた」と懐かしんだ。後輩の活躍に「若返った。最高のチームだ」。

慶応の三塁側アルプス席は、赤と青のメガホンを手にした応援団で埋め尽くされた。

「『若き血』いくぞー」。試合開始と同時に応援指導部の浜田英聖主将（2年）が声を張り上げると、アルプス席に応援歌の大合唱が響いた。

赤と青のメガホンで埋め尽くされた慶応の三塁側アルプス=小島弘之撮影▶



慶応の大応援団を率いる応援指導部員たち=8月23日、小島弘之撮影

一回の攻撃、先頭打者の丸田湊斗（みなと）選手（3年）が右翼席に本塁打を放った。「♪慶応、慶応、陸の王者、慶応——」。応援の熱気は早くも最高潮に達した。浜田主将は「慶応の歴史を感じます」。

試合は終始リードしたまま終盤を迎え、勝利。アルプス席は総立ちとなり、歓声が地鳴りのように球場全体に響いた。野球部員の鈴木幸太選手（3年）は「107年間、慶応の野球部員たちが思いをつないできて、今それが一つになった」と興奮気味に語った。

グラウンドの選手も応援の力に感謝した。

プロ野球の西武などで活躍した清原和博さんの次男、勝児選手（2年）はこの日九回、代打で打席に立った。四球を選んで今大会初めて出塁した。「体の底からパワーが出てきて、自分の力以上のものを出させてもらえた。すごい歓声を頂いて、自分は幸せ者です」と語った。

三塁側アルプスで慶応の応援を引っ張る応援指導部の浜田英聖主将=23日、小島弘之撮影

107年ぶりの優勝が決まり、三塁側アルプスで喜び合う慶応の野球部員たち=8月23日、小島弘之撮影

系列校の子どもたちや卒業生らも一体になって応援した慶応三塁側アルプス=2023年8月23日、上月英興撮影



前回優勝した1916（大正5）年のメンバーにゆかりのある人も、テレビで試合を見守った。

当時の慶応普通部（現慶応）には、大会初の外国人球児で米国籍のジョン・ダン選手がいた。ジョン選手のめいにあたる團淳子さん（90）は大阪市の自宅で観戦。「慶応の優勝は身近に感じられてうれしい。おじさんも喜んでいてと思います」

札幌市の「エドウィン・ダン記念館」のスタッフ、園家広子さん（73）もテレビ観戦した。エドウィン・ダンさんはジョン選手の父。「107年ぶりの優勝で信じられません。エドウィンとジョンと私の3人で応援しているような気持ちで試合を見ていました」と話した。

（小島弘之、松永和彦、上月英興）

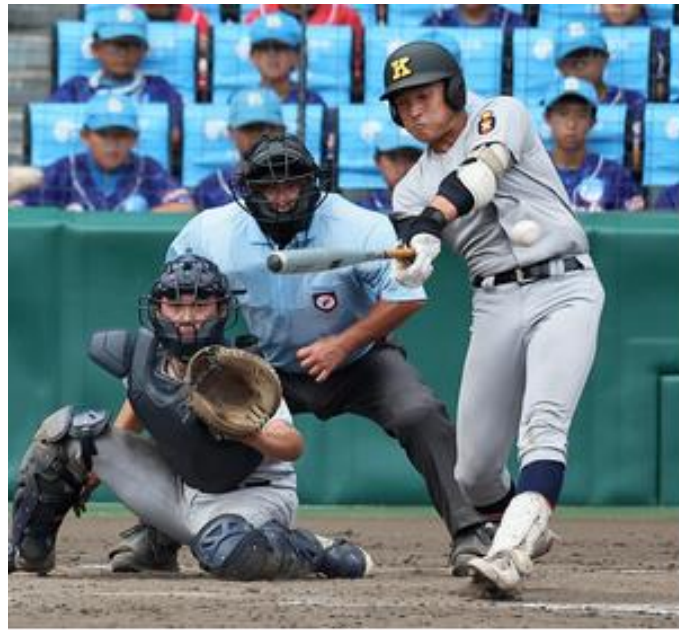
■慶応 V、107年前は

前身の慶応普通部（東京）として1916年の第2回大会決勝に挑み、市岡中（大阪）を6・2で破って初優勝した。三回に一举5点を奪い、先発山口が制球力を生かして3安打2失点で完投した。当時は24年の阪神甲子園球場（兵庫県西宮市）の完成前で豊中グラウンド（大阪府豊中市）で開催され、115校が参加した12地区の各代表が頂点を争った。



赤と青のメガホンで埋め尽くされた慶応の三塁側アルプス=8月23日、小島弘之撮影

メガホンをたたいて応援する慶応の生徒らで埋め尽くされた三塁側アルプス=8月23日、上月英興撮影



慶応一仙台育英 五回表慶応 2 死一塁、適時二塁打を放つ福井。捕手尾形=田辺拓也撮影

朝日新聞
DIGITAL

「ボールめっちゃ見える」慶応の福井

幼稚舎で書いた夢かなえる一打

2023年8月23日

リードはわずか1点。五回表、7番打者の福井直睦（なおとき）（3年）の一打が、相手に傾きかけた流れを断ち切った。

「低めの変化球には手を出さない。あとは楽しむだけ」と打席に立った3球目、外角にきた甘めのスライダーを「待っていた」と強振。打球は左翼深くに落ち、適時二塁打に。照れながらガッツポーズを見せ、ベンチ、アルプスからの歓声に応えた。その後、チームは4点を追加して、昨年の覇者を突き放した。

公式戦で仙台育英と戦うのは「出ただけで満足していた」という選抜大会以来。当時は4番に座っていたが、低めの変化球に手を出し、5打数無安打に沈んだ。「打てる気がしなかった。高橋（煌稀（こうき））投手が大きく見えた」と振り返る。

打撃不振で4番の座を明け渡した。「うまくいかないな」と肩を落とした時期もあったが、「自分の結果よりもチームの勝利」と切り替えた。

フォームの改善やメンタルトレーニングに励み、甲子園では17打数8安打3打点。決勝では先発湯田統真、2番手高橋の「ボールがめっちゃ見えるな」と自身の成長を感じた。

九回表、代打の清原勝児（2年）に打席を託し、優勝の瞬間はベンチから見届けた。「決勝が今までで一番楽しくて幸せな試合だった」と語る福井の目に涙はない。ただ、充足感だけが漂っていた。

最近見つかった慶応幼稚舎の頃に書いた作文には、「塾高で甲子園に出て優勝すると書いてあった」。幼い頃から夢見た日本一。「まだ優勝した実感はわからないが、応援してくれた人たちに恩返しできた。ありがとうと伝えたい」（手代木慶）

朝日新聞デジタル及び朝日新聞紙の他記事もご覧ください

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.

（黄地紋・林 莊祐）